



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

気になる役者

この連載を始めたときは「携帯から写真を撮ってアップして、連載？」なんて思っていたが、最近では当たり前になってきている。たった2、3年で世の中は進化するものだ。

しかし世の中の動きに比べると芝居の世界はやっぱりアナログだ。今、大阪で松竹新喜劇の演出をしているのだが、一般の人たちよりアナログ気味の私たちでさえ、

「ええ？ まだそんなことやってるの？」

と思うほど超アナログだった。

まず、お稽古中に足袋を履いてる役者さんがいる。「現代劇なの？」
と、思って聞くと、

「稽古場では足袋を履くことの方が多から、これが落ち着くねん」

という答えだった。本番では靴下にスリッパなのだが、稽古では足袋。
なんだか明治時代の人と一緒に居るみたいだ。

稽古着も私たちは普通にジャージとか着てるのだが、新喜劇では「現代劇」をする時は軽装でいらしく、Gパンをはいて稽古している人も
いる。

「稽古前に軽くアップします」

というと、

「なにを上げるんですか？」と聞かれたので、

「モチベーションかなあ」と答えて、パニックになられた。

「なにを上げるの？」と聞いた役者は本当に言葉通りに聞いていたからだ。
彼等の中にはウォーミングアップという言葉がないらしく、稽古前

に柔軟するとか、腹筋や背筋をすることもあり得ないので「アップ」と言われて、なにかを持ち上げたりすると思ったようだ。

その上、私が「モチベーション」と言ったので彼はさらに混乱した。「餅？ ベーコンシヨルダー？」と考え込んでる姿を見て「この人、冗談言うてるのかな？」とこつちが考えたくらいだ。

小道具さんに、

「ちゃぶ台の上にベトナム風の蓮の置物とか、墨盆栽とか今つぼいもの置きましよう！」

と言つて「……」と黙り込まれるし、衣裳さんに、

「足の綺麗な子がいたら、マーメイドラインのスカートはかせてあげたいな」

と言うと「マー…なに？」と聞き返されて、

「あ、人魚姫みたいな感じのお尻のラインが丸くて、ちよつと裾が広がってるスカートなんですけど」

と説明をしたのに「人魚姫！」のひと言で止まってしまった。

そんな状況の中での稽古だが、温故知新というか、昔からやつてる芝居を教えてもらったりして、勉強になっていることも多い。楽しいというか、ためになる現場だ。特に役者さんはメチャクチャ上手い！舞台を踏んできた数が違うのかもしれないが、痒いところに手が届くというか、こつちが演出で考えてることを糸口だけ言うと「あ、はいはい」と簡単にクリアしてしまう。稽古時間が少ないと聞いたが、それも領ける。あれだけ上手かったら稽古なんてする必要はないのだろう。

その中でも気になるのが「曾我廼家玉太呂（そがのや たまたろ）」さんである。今回は私の演出する「影に居る男」で、歌舞伎の女形を演じてもらってるが、上手いというか、あまりの自然さに、

「玉太呂さんは、女形だったんですか？」
と聞いてしまったくらいだ。

しかも彼はもう一本の「お祭り提灯」という作品では、なんと8歳の丁稚を演じている。すごい演技力である。

「名バイプレイヤーですよね」

と言うと、

「そういう言い方があるんや」

と感心されただけで、誉められたことに対する感想は全然なかった。芝居なんて誉められたりすることからは始まらないという姿勢なのだろうか。大人な役者さんである。

ここまで誉めて、載せてる写真は10円で買ったサングラスをかけてふざけてる姿で申し訳ないが：そんな気になる役者を観たいという人が居たら、是非10月6日から19日まで、大阪は道頓堀の松竹座でやってる芝居に足を運んでくださいませ！（注 チラシに載ってる玉太呂さんの写真
真は18年前のらしいので、役名で探して下さい！）

【著者略歴】

わかぎさるふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より故中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『イブの抜け穴』『大阪弁の詰め合わせ』など多数。
